Osaka University Knowledge Archive

Title	関節リウマチの疫学的研究
Author(s)	宮内, 壽彦
Citation	大阪大学, 1968, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29800
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【14】

氏名・(本籍)	宮内壽彦（みやうちとしひこ）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 1526 号
学位授与の日付	昭和43年7月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**関節リウマチの疫学的研究**
論文審査委員	(主査) 教授 水野祥太郎
	(副査) 教授 山村 雄一　教授 関 悌四郎

論文内容の要旨

〔目　　的〕

近年慢性関節リウマチに関する広範な研究が進められているが，この疾患の本態は未だ不明であり，わずかに治療面で光明が見出されているにすぎない。そこでリウマチ性疾患に関する疫学的調査を進め，罹病頻度，風土環境による差異などの実態を知ることが必要とされてくる。1949年 Kellgren 一派，1951年 Cobb 一派によりこの方面の研究がはじめられ，1961年および1966年国際リウマチ学会において，いわゆる慢性リウマチ病に関するシンポジウムが開催されて，世界の各地域における罹病頻度が一応知られるようになった。しかし，リウマチ性疾患の診断基準や，疫学調査の方法などについて未だ問題点があり，ことにわが国においては正確な実態が知られていない現状にある。著者はこのような理由から，近畿地方の一般住民におけるリウマチ性疾患の有病率・発生頻度・病気の経過などを調査し，正確かつ広汎な成績をえたが，これは今後の疫学的研究の基礎となりうるものと考える。しかし，真に疫学的研究の目的にそうためには，できるだけ多数の患者をみつけることが必要で，そのためにはアンケート調査によらざるをえない。そこでこの方法についての分析を行なって，これを将来応用する場合の基礎資料をうることができた。

〔方法ならびに成績〕

1961年6月より1966年1月までの調査成績をまとめたものである。近畿地方の都市地区，農村，農漁村地区において調査し，72〜92%の受診率をえた。大阪府豊中市，富田林市東条地区，和歌山県上富田町岩田地区においては全年令の住民を調査対象に，阪大整形外科関節炎クリニック担当の医師団による戸別訪問調査を行なった。大阪府八尾市3地区，福井県三方町においては，大阪府立成人病センター調査部集検一課と合同して，40才以上の成人を対象に呼出し調査を行なった。上記の富田林市東条地区，上富田町岩田地区において，戸別訪問調査とは切離して，調査方法の比較のためにアンケ

ート調査を行なったが，アンケート用紙の形式も両地区で異ったものを用いた。慢性関節リウマチの診断基準は American Rheumataism Association の設けたもの，あるいは住民調査のための基準に機械的に従ったものではなく，詳細な問診ののち臨床診断し，可能なかぎり脊椎・四肢関節のレ線検査とリウマチ血清反応を行なった。

慢性リウマチ病は戸別訪問調査を行なった3地区全体では 8.7%の頻度でみられた。慢性関節リウマチは全年令について 0.3%の有病率を示し，地区による差はみられなかった。45〜64才の年令層では0.4〜0.7%の有病率を示した。追跡調査によってえられた慢性関節リウマチの年間発症率は 0.1%であり，このうち possible rheumatoid arthritis から definite rheumatoid arthritis に移行した2例がみられたが，これは従来の見解とは異ったものであり，慢性関節リウマチの早期診断，予防措置の面から注目すべきものであると考えられる。慢性関節リウマチ性疾患，ことに関節症，関節外リウマチは都市地区に比べ農村・農漁村地区で有病率の高いことが知られた。

アンケート調査を行なった2地区のうち，富田林市東条地区は，それまでにすでに2回調査を行なっていたこともあり，上富田町岩田地区の成績と比べると false positive, false negative とも有意に少なかった（$p<0.05$）が，それでも尚 6.0 %，false negative の回答がみられた。

〔総　　括〕

1966年第10回日本リウマチ学会総会の，疫学的調査に関するシンポシウムにおいて，日本における慢性関節リムマチは0.3〜1.2%の頻度（全年令に対し）でみられると報告されたが，本論文の全年令に対し 0.3%という有病率に厳密な基準をおいた場合，わが国における正確な頻度を示しているものと思われる。これは諸外国にみられる有病率が35〜64才の年令層について4.0〜6.0%であるのに比べて著しく低いものであり，日本人には慢性関節リウマチの発症を抑制するような predisposition が存在するものと考えられる。

また有病率の低い慢性関節リウマチの疫学調査には，アンケート調査による抽出を併用する必要があるが，調査にあたったのは，理解しやすい形式のアンケート用紙を用いるとともに，あらかじめ調査対象の理解度を深めておくことによって，相当の信頼度のある成績がえられるものといえるが，十分の注意をはらっても戸別訪問調査によるものより，約20%低い有病率を示す結果となることはさけられない。

論文の審査結査の要旨

関節リウマチの本態を明らかならしめるための アプローチの一つとして徹底的な地域的住民調査を経験ある専門家のみの手によって行なった貴重な研究である。したがって本研究はわが国におけるこの種の研究の最も広汎かつ正確なものとして，世界的な文献して残さるべき意義をもつ。さらに本研究の一端として，調査方法論を検討し，ひろいアンケート調査を如何に行なうべきかについて分析し，全住民調査と比較するなど今後の研究に資するところが多いと期待される。